

住まいづくりは、まちづくり ——支援付き共生住まい「わがままハウス山吹」



季節に合わせた装飾など、地域住民の
ちょっとした気遣いが暮らしが彩る

住み慣れた地域で暮らし続けたいと願う人は多い。一方、仕事や家族の変化を機に都市部から地方への移住を検討する人も増えている。移住先で人生を豊かに全うするためにどんな福祉が必要か、どんな住まい方が考えられるのか。必要なサービスが地域になければ「みんなでつくる」。山梨県北杜市的一般社団法人「だんだん会」には、そんな精神があふれている。

撮影／葛谷舞子 文／本紙・元木知子



支援付き共生住まい「わがままハウス山吹」。敷地内にはヤマブキが自生する

◆くずたに・まいこ 群馬県生まれ。フォトグラファー。障害の有無にかかわらず安心して撮影できるスタジオ「Photostudio-Home」代表。

八ヶ岳南麓に恋して

山梨県の北西、長野県に接する北杜市は、移住希望者からの人気が高い自然豊かな地方都市だ。一般社団法人「だんだん会」理事長の宮崎和加子さんも、八ヶ岳南麓の自然に魅了されて移住した一人。東京都内で40年近く、訪問看護の仕組みづくりや認知症の人ためのグループホーム開設など、市民が地域で暮らし続けるためのサポートを仕事としてきた。

「山形県出身だからか、山が大好き」とほほえむ宮崎さん。夫の仕事の関係もあり、しばらくは東京と行ったり来たりしながらいざれは定住する先を、元気なうちから探しておこうと思っていた。東京から2時間圏内、空気が澄み、山々をきれいに見渡せる北杜市が、宮崎さんの希望にぴたりと合った。庭先からネギやシソを探ってきて蕎麦を食べる。そんな暮らしを80歳、90歳になつても続けていこうと、退職後に移住した。「一人も知り合いのいない土地に、落下傘のようにポツンとやってきたの」



一般社団法人「だんだん会」理事長、宮崎和加子さん。
法人や事業などの名称は「親しみやすく覚えやすく」をモットーに、常に「みんなで」話し合って決めると言つ

ところが、「調べてみたら北杜市の介護サービスが意外に少なかつた」と宮崎さんは打ち明ける。折りしも、市が認知症の人のグループホーム開設事業者を公募した。文句を言つても始まらない。造つてもダメ。東京での経験を生かして、いい中身、徹底した自立支援のグループホームを造ろうと思いました。市の事業に応募するため、宮崎さんは医療、看護、介護、経営と分野ごとの専門家を理事に迎え、だんだん会を設立。看護職が寄与したいという法人の理念に共感してもらえたのか、介護職員が集まつてくださつた」と宮崎さん。グループホーム開所前の2月には、「地域看護ステーションあんあん」がスタートし、医療ニーズの高い人、終末期の人の自宅療養を支援する体制ができた。

グループホームに続いて、北杜市が定期巡回サービスの公募を始めると、宮崎さんは職員と協議を重ね、赤字覚悟でこれに応じた。1日複数回巡回して介護や生活支援をするサービスなしに、高齢者が自宅で暮らし続けることはできないと熟知していたからだ。重度の人、終末期の人も対象にしたいと、トップを看護職が担い、必要に応じて職員を増やしていくことにした。10月、必要最低限の人員で定期巡回サービス「てくてく24」が始まった。

中心になつて運営していくような法人にしようと一致した。

2016年、だんだん会は選定され、

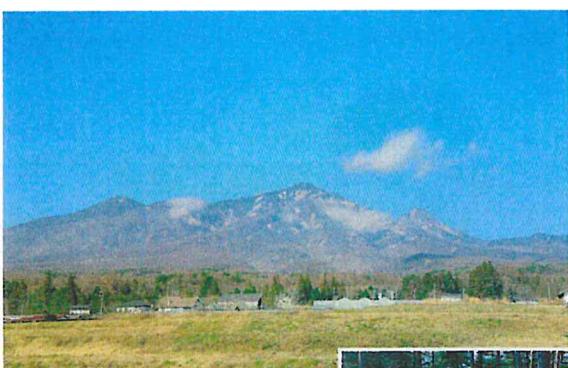
翌年4月、認知症高齢者のグループホーム「わいわい白州」を開所。「地域住民と力を合わせ、地域の保健福祉の向上に寄与したい」という法人の理念に共感して

住民参加の住まいづくり

JR小淵沢駅から車で5分、南アルプス・北岳を望む馬術競技場の隣に、だんだん会が運営する「わがままハウス山吹」がある。朝8時から夜8時まで「寄り添いスタッフ」と介護職員の二人が常駐し、超高齢でも、要介護でも、終末期でも、安心して暮らせるシェアハウスだ。

わがままハウス山吹のきっかけをつくったのは、移住者の自主的な集まり「八ヶ岳ふるさと俱楽部」（のち「八ヶ岳根っここの会」）。4、5人のメンバーが助け合って暮らすための勉強会を続ける中、ホームホスピスのようなものを造りたいとの構想が生まれ、その方法を模索していた。その時知り合いの紹介で相談することになつたのが宮崎さんだつた。

八ヶ岳根っここの会のメンバーの希望は三つあつた。まずは、家で終末期を迎える人のホスピスボランティアすること。二つ目は介護認定の有無にかかわらず集まるサロンの運営。三つ目は入居者同士の交流がありプライバシーも守れるシ



八ヶ岳南麓の高原地帯。
右奥は赤岳



隣接する山梨県馬術競技場。時折見掛ける馬の姿が入居者の癒やしにもなる

一方、八ヶ岳根っここの会のメンバーや地域住民の協力には目を見張るものがあった。庭の手入れをする人、季節に合わせ室内の装飾をする人など、それぞれができることを提供する。寄付金代わりに玄関に大きなステンドグラスを取り付けた人や美術品や工芸品を寄付する人もいる。体が弱つても介護施設へ入所せずに暮らせる家、人の声が聞こえ、自分がしたい暮らしができる家、そういうものを造ろうと話し合い、合意してきた強みだ。ありませんでした。要介護でもどこか弱いところがあつても、共に暮らし合える居場所、シェアハウスにしたかつたんです」と宮崎さん。先駆性と実現可能性が認められ、補助金を獲得した。

10人程度の入居者がいなければ経営は成り立たないと考え、地域に増えてきた

空きペンションの中から、現在の建物を選んだ。床暖房を入れ、風呂やトイレをバリアフリーにし、スプリンクラーと室内用の昇降機を付けた。もともと若者向けに造っていた築30年のペンションは改築費がかさんだ。

一方、八ヶ岳根っここの会のメンバーや地域住民の協力には目を見張るものがあった。庭の手入れをする人、季節に合わせ室内の装飾をする人など、それぞれができるなどを提供する。寄付金代わりに玄関に大きなステンドグラスを取り付けた人や美術品や工芸品を寄付する人もいる。体が弱つても介護施設へ入所せずに暮らせる家、人の声が聞こえ、自分がしたい暮らしができる家、そういうものを造ろうと話し合い、合意してきた強みだ。造ろうと話し合い、合意してきた強みだ。

見守られ、自由に暮らす

こうして多機能型のシェアハウスが完成、19年4月から入居が始まった。わがままハウス山吹の一番の特徴は入居する人を選ばないこと。一般に介護施設は対

象となる人が決まっているが、ここでは夜間の見守りが必要な人を除き、年齢制限も介護認定の必要もない。北杜市の住民票がなくとも入居でき、二人で一部屋を使うことも可能だ。「認知症の人もいればそうでない人もいる。激しい性格の人、穏やかな人、その違いがそのまま生活に現れます」と宮崎さん。「それでも



▲「ハケ岳根っこ会」のメンバー地域住民から寄付された絵画や工芸品



▲「わがままハウス山吹」の魅力について、「みんな仲良し。それから自由です」と答える入居者



▲「一人暮らしを心配していた親せきに安心してもらいました」と話す入居者



▲ベンションをバリアフリーに改築。明るく、落ち着いた雰囲気の室内

介護が必要な人は定期巡回のサービスを受ける。健康状態によつては、看護師や医師が往診し、理学療法士が來ることもある。内部の仕組みはシンプルにして、外から必要なサービスを持つてくるトッピング方式だ。

定期的に開かれる「ほっこりミーティング」では、入

介護が必要な生活支援のための声掛けではなく、読んだ本や買いたい洋服、気になるニュースの話ができる身近な人の存在が、入居者の生活を豊かにしてくれる。

「延命が第一優先のような社会になってしまったけれど、そんなことはありません。人生の最期に心から関わり、できる限りのことをして、ご本人も周りの人も満ち足りた気持ちになる。みんながハッピーになるお別れ。そういうものが本当にあるの。そういうふうにできるのよ」と、宮崎さん自身、幸せそうに語った。

地域の市民の交流と参加が、自分たちが望むサービスを生み出す。共助と自助を支える公助が必要だ。

一緒にいられる住まい方は、いわばまちづくり、コミュニティづくりです」

二つ目の特徴は、人との関わり合いが基本にあること。入居者同士の交流を促す家づくりに力を注いでいる。入居者の一番身近にいるのは介護職ではなく、寄り添いスタッフという地城市民だ。「トイレに行つたか」「食事はできたか」と

たくさんのケアサービスが提供されば、豊かな老後を暮らせるわけではない。ただ与えられるだけでは、本当の満足は得られない。自分がつくる。より良いものにしていく。地城市民と共にそうした実践を生み出していくことが宮崎さんのテーマだ。

生活と自治 2



No.622 100YEN

特集

暮らしの場としての地域、 これからの居場所づくり

コロナ禍で見えた変化 新たな働き方、暮らし方の可能性／地域で暮らす、地域で生きる

聞いてみました！ 経営エッセイスト 藻谷ゆかりさん

p04 Myオピニオン 茂木厚子さん(早期発達支援士) 第1回

p22 この人に聞きたい せやろがいおじさん(お笑い芸人) 第2回

p34 わかるかな？ 誰でもクッキング

表紙の写真は何かの「食べ物の途中」。この食材のレシピを紹介